

「もう一度、触れて」

—二稿—

2026/9/30

脚本 太郎

〈人物表〉

須藤 譲 (29)

サラリーマン

長峰 正也 (36)

サラリーマン

1. 駅・階段（昼）

カッチリとしたビジネススーツを着たサラリーマン、須藤譲（29）、息を切らせながら階段を上っている。

手には黒革のビジネスバッグ。

腕時計を確認。

斜め上を見る。

階段は果てしなく続いており、先が見えない。

左隣を見る。

サラリーマン数人が、須藤と同じように息を切らして階段を上っている。

須藤 「はい、はい。承知しております。午後の会議には必ず間に合わせますので。え、今ですか？」

須藤、右隣りを見る。

窓の外、ひたすら真っ白い空間が広がっている。

須藤 「いえ普通に駅の階段なんですけど異常に長くて」

何人かのサラリーマンが倒れる。

須藤、それにビクリと反応。

駆け出す。

須藤 「必ず行きますので」

2. 駅・全景（昼）

広大な真っ白な空間の中。

ホームや線路、渡り廊下、改札といった駅の施設が

縦横無尽に、雑に増設され折り重なるようにして、無限に広がっている。

遠い上空には巨大な張りぼてのような太陽が、幾つかの風船に吊るされて浮かんでいる。

3. 駅・ホーム（昼）

須藤、階段の場で息を切らせている。

ベンチには、憔悴した人々が何人も座りこんでいる。

アナウンス「間もなく、6億番線に、電車が参ります。勝手にしてください」

ベンチに座っていた人々、のっそりと立ち上がる。
フラフラと前に進む。

電車が見え始める。走行音。

人々、ホームから落ちる。

須藤 「えっ」

電車の人々に衝突。

電車、簡単に脱線。

横転。

地面との摩擦に火花が散る。

須藤に向けて迫ってくる。

須藤、悲鳴を上げて走り出す。

ホームの端まで迫る。

飛び降りる。

すぐ下にも線路があり、丁度別の電車が走行中。

4. 電車・屋根

須藤、電車の屋根の上に倒れている。

ゆっくりと身を起こす。

真っすぐ前を見る。

スマホを取り出し、操作する。

5. 電車・全景（夜）

発信音。

電車、真っ白な空間の中、駅の施設の合間を縫って、

真っすぐに走っていく。

6. 駅・コンコース（夜）

真っ暗な寂れたコンコース。

いたるところに電車のドアや改札のゲートが突き立っている。

デフォルメされた駅員の着ぐるみが何体も、拳銃を手に辺りを徘徊している。

須藤、1つのドアに背中を預けている。

肩でスマホを挟んで通話しながらノートパソコンを

激しく操作している。

銃声が響く。

駅員1の声「発射いたします。発射いたします」

駅員1が発砲。銃声。

駅員1「電車が発射いたします」

発射された銃弾、小さな電車（1車両のみ）である。

小さな乗客たちが乗っていて、恐慌状態。

男、被弾。悲鳴。

倒れる。

須藤 「はい、はい。今送信いたしました。はい、その件でしたら……承知しました。すぐ確認します」

駅員2の声「ご注意ください。発射いたします」

悲鳴。

銃声。

須藤 「はい、明日こそ必ず」

須藤、近くにいた駅員2と目が合う。

緊張で顔が歪む。

駅員2「電車が発射いたします」

駅員2が拳銃を発砲。

発射された銃弾、小さな電車である。

車内には小さな乗客が乗っていて、皆内側から激し

く窓を叩いている。

須藤、電車弾頭の中の小さな乗客たちと目が合う。

電車弾頭が須藤の肩をかすり、後方の改札に着弾。

須藤、肩を押さえて駆け出す。

須藤 「何が何でも明日こそは、死んでも出社致しますので」

7. 橋（夜）

真っ暗な空間の中、大きな三日月のハリボテと無数の星のハリボテが、それぞれ風船に吊るされて浮いている。

真っすぐ伸びる橋。

そこを須藤が自転車で行っている。

その後ろを電車が追う。

電車の窓、内側から血で染まっている。

須藤、一心不乱に自転車を漕ぐ。

電車、徐々にスピードを上げる。

前方に門のように巨大な改札口が見えてくる。

須藤、胸ポケットからスマホを取り出す。

スマホカバーにはPASMIOが入っている。

須藤、スマホを前方へ向けて勢いよくかぎす。

咆哮。

須藤、改札口の眼前に至る。

「カードリーダーに勢いよくスマホを叩き付ける。

ピンポーン、という音。

改札音声「もう一度、触れてください」

須藤、閉まったままのフラップドアに自転車をぶつ

ける。

派手に転倒。

顔を上げ、焦燥感に満ちた表情。

手を伸ばし、スマホをICカードリーダーに叩き付

ける。

改札音声「チャージしてください」

須藤、絶望の表情。

振り返る。

券売機があるのは、距離を隔てたところにある、円

柱状の柱の上である。

須藤、悔しそうに改札に拳を叩き付ける。

項垂れる。

再び拳を握り締める。

振り向きざま、拳銃を発砲。

銃弾、電車弾頭である。中には小さな乗客も乗って

いる。

小さな乗客たちは恐慌状態である。

電車弾頭は電車にめり込む。電車弾頭の窓が内側か

ら赤く染まる。

電車、止まらない。

須藤、諦めていない表情。

再び発砲。

弾丸、電車弾頭。

小さな乗客たちは小さな駅員たちと銃撃戦の最中である。

電車弾頭は電車にめり込む。窓が内側から赤く染まる。

電車、止まらない。

長峰の声「こっちだ」

須藤、振り返る。

円柱の上で長峰正也（36）が手を伸ばしている。

長峰 「PASMOを、早く」

須藤、ハツとする。

PASMOを投げる。

長峰、PASMOを受け取る。

素早くPASMOと千円札を投入。

素早く須藤に投げ返す。

須藤、必死の形相でPASMOを受け取る。

電車が須藤の目前まで迫る。

須藤、雄叫びを上げてPASMOをICカードリーダー

ーに叩き付ける。

フラップドアが開く。

須藤、改札の内側に転がり込む。

フラップドアが閉まる。同時に電車が衝突。

フラップドアの内側、老朽化した巨大なプラットフ

ォーム。

須藤の荒い呼吸。

振り返る。

円柱の上の長峰、微笑んでいる。

長峰 「間一髪だったな。アンタも社畜か？」

須藤、厳しい表情で立ち上がる。

須藤 「ああ。何としてでも出社しなければならない」

長峰 「何故だ？」

須藤 「選択したからだ。気高い消耗品であることを」

長峰も厳しい表情になり、

長峰 「それは本当にアンタの意思か？」

須藤、訝し気に、

須藤 「どういう意味だ？」

破碎音。

窓が割れ、駅員3が飛び出してくる。

長峰、顔を引きつらせて、

長峰 「まずい」

駅員3、拳銃を発砲。

電車銃弾、須藤の眼前に迫る。

運転席には小さな須藤が乗っている。

小さな須藤、顎が外れそうなほど口を開けて絶叫している。

須藤も同じ表情で絶叫する。

8. 現実世界・電車・車両(朝)

電車のドアが開く音。

須藤、ボックス席に座って項垂れている。

数人の駅員たちが彼を囲っている。

須藤のすすり泣く声。

駅員 「お客様？ 大丈夫でしょうか？」

須藤、泣きながら、

須藤 「行きたくない」

終